

大腿動脈および静脈穿刺後の安静に対する看護

角田 美咲¹、佐久間 美樹¹、星 瑠菜¹、鹿子田 美恵¹

¹公益財団法人星総合病院

【はじめに】先行研究の課題から、カテーテル治療による大腿動脈および静脈穿刺後、認知機能が低下している患者はプロトコールに準じた安静時間より長いことが明らかとなったため、安静時間予定表を作成、ベッドサイドに表示し安静の必要性と安静時間の確認を行った。【目的】大腿動脈および静脈穿刺後、安静時間予定表を表示し過剰な安静を減少させることができる

【方法】20XX年1月～4月に大腿動脈、静脈によるカテーテル治療後、カテ室にて圧迫止血固定した患者59名【定義】過剰な安静：プロトコールより長い時間での安静【結果】プロトコール運用率は上昇していた。安静時間予定表を表示後、安静保持可能である患者が増加した。看護師、患者共に安静時間予定表を使用した結果、安静の必要性についてわかりやすいなど意見があった。今回の安静保持困難事例に関しては説明に加え疼痛コントロールを実施した。【考察】プロトコール運用率が上昇し認知機能低下の患者でも使用されており過剰な安静は認めなかった。安静時間予定表を表示することで看護師から説明の機会が増え、治療後の安静保持を支援できた。認知機能低下の患者だけでなく説明不足も補えたことが示唆された。【結論】安静時間予定表を活用することで安静保持患者が増え、過剰な安静が減少した。【今後の課題】安静時間予定表の表示を継続する。患者の苦痛を緩和する対応を考え続ける必要がある。